青銅器と大刀の世界

「青銅器と金色の大刀」のギャラリーには、博物館の主要なコレクションのひとつを表す、古代の青銅器が展示されています。弥生時代（紀元前 800 年～西暦 300 年）にさかのぼる刀、矛、鐸は島根県で出土しました。これらの多くはまとめて埋まっていたり、列に並べられたり、入れ子状に積み重ねられたりしており、日常的に使用するのではなく、儀式用の道具として作成された可能性があります。道具が埋まっていた理由については、神への供物ではないかという説など、様々な諸説があります。これらの遺物は、古代の青銅器が単独で埋蔵されているものとしては日本最大級であり、国宝に指定されています。

1984 年と 1985 年の発掘調査により、出雲の荒神谷遺跡から 358 本の刀、16 本の矛、6 個の鐸が出土しました。これらの刀はすべて同じデザインで、正式な証拠はないものの、出雲地方を中心とした地域で発見された他の刀剣と形状が似ていることから、地元で生産されたと考えられています。展示室には、オリジナルの剣と、埋葬された当時の剣の輝きを再現した、一面に光り輝くレプリカがあります。

1996 年、雲南市の加茂岩倉遺跡で発掘調査が行われ、複雑な装飾が施された 39 個の銅鐸が発見されました。これらの銅鐸は、小さな銅鐸が大きな銅鐸の中に入るようにして、2 組で重ねて埋められていました。その中に、対のない大きな銅鐸がひとつありますが、その理由は謎のままです。

また、このコーナーでは、6 世紀から 7 世紀にかけての装飾された武器もいくつか展示されています。これらの華やかな大刀は、当時の地方豪族の富と地位を物語っています。